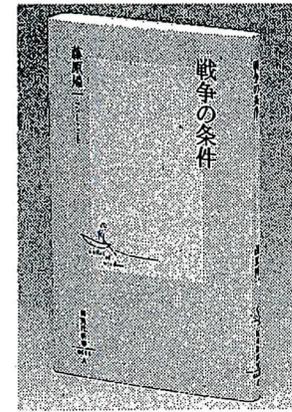


戦争の条件

藤原帰一著

政治の可能性と多元性



(集英社新書・756頁)

ふじわら・きいち 1956年
生まれ。専門は国際政治・東
南アジア政治。東京大大学
院法学政治学研究科教授。

本書は、筆者が言論誌に連載した「国際政治の練習問題」を再構成した一冊である。「戦争の条件」とは裏を返せば「平和の条件」でもある。筆者は戦争と平和を具体的な国家間の問題として講じるのではなく、「A国がB国に軍事侵攻を開始した。B国はどうすればよいだろうか」といった抽象的な課題の下で論理を展開している。難解な前提知識は必要ない。これは学ぶための本ではなく、「思考を深める」ための本である。

題材は多岐にわたる。侵略と自衛、主権と人権、覇権国家と国際社会、民主主義と平和、軍事的覇権と経済的覇権、領土問題における国際法の論理と国民国家の論理、歴史認識問題における戦争の記憶とナショナリズム、ナショナリズムと多文化主義、平和主義と集団的安全保障。いずれも、対立項の間には競合する複数の選択肢が相応の合理性を持って存在しており、「正解」を導くことは容易ではない。例えば、ある国の国民をその惨状から救出するために軍力で独裁政権を打倒することは許されるのか？ この問いにリブラリストは「是」と答えるかもしれないし、リアリストは「否」と答えるだろう。国際社会とは文化や価値の異なる国々が集まった多元的な社会である。貧富の差もあれば、歴史・文化・宗教の違いもある。しかし、自由や民主主義のような人類共通の普遍的な理念があることも否定できない。そうした普遍性を積極的に評価するのがリブラリストであり、否定的に評価するのがリアリストである。

著者は特定の立場に安易に立脚することを避けている。リアリズムにせよ、平和主義にせよ、または国際法や国際制度に基づいたリブラリズムにせよ、特定の価値や手段に依拠できない暗闇の中で暴力と不正を回避することが国際政治学の神髄である。「政治は可能性の芸術」というリスマルクの至言がある。異なった価値がせめぎ合う中で、多くの可能性がひびき合っているのだから。そうした政治の可能性と多元性こそ、本書の重要なメッセージである。

(九州大准教授・政治学 大賀哲)

西日本新聞
2013.7.14.